

景観から考える人と自然環境

文・漆原次郎



熊谷 洋一 (東京大学名誉教授
兵庫県立淡路景観園芸学校名誉学長)
くまがい よういち



1943年(昭和18年)9月20日生まれ。公園や緑地をはじめとする「みどり」の環境を評価するとき「景観」を考えに入れることの大切さを唱え、その方法を考え出した。そして、人びとがみどりに親しみ、みどりを愛することにつながる数々の取り組みをしてきた。

人は公園や緑地などのみどりに触れあうと、「自然っていいな」「心地いいな」「きれいだな」と感じる。意識しないかもしれないが、そう感じるときそこには「景観のよさ」がある。

熊谷洋一さんは、自然の環境において景観がいかに大切であるかを考え、研究してきた。そして、公園づくりや街づくりなどを計画したり評価したりするとき、景観の視点を考えに入れることを唱え、その方法を築いてきた。熊谷さんのこうした取り組みにより、人と自然の関わり合いは、より豊かなものになっている。

「大先輩」から学んだ「真善美」の考え

熊谷さんは、戦争のさなかの1943年(昭和18年)、東京で生まれた。まもなくして空襲を避けるため新潟県山古志村(いまの長岡市)に移った。戦争が終わり東京に戻ったが、熊谷さんの家も、あたりの建てものも、すべて焼けて失われた。家のあった神楽坂から東を見れば、ぽつんと残る東京大学の安田講堂の姿。西を見れば富士山が見わたせる。「人はみな心に原風景をもつもの。私にとっての原風景は焼け野原でした」と熊谷さんは言う。

戦争が終わってからの暮らしも厳しかったが、それでも熊谷さんは学校に通い、小学校、中学校、高校と進んだ。好きな科目は生物だ。東京大学に入ると、農学部林学科に進むことに決めた。林学は、森林や林業について学ぶ分野だ。熊谷さんは「自然と人間の関わりについて学びたいと考えていました」と言う。「人間のことが好きだったからです」。

林学科には造園学研究室があり、熊谷さんはそこに入った。造園学は、庭園や公園、さらに広く都市の道路や広場などを造るために学ぶ分野だ。この研究室からは、偉大な「先輩たち」がたくさん出ている。東京の明治神宮の森をつくり「日本の造園学会を始めた人」である上原敬二。自然公園の専門家で「国立公園の父」ともよばれた田村剛など。中でも、熊谷さんの「大先輩」は、日比谷公園を設計し「日本の公園の父」ともよばれる本多静六だ。

「私が研究者になるころ、日本の経済は成長しつづけ、土木や開発の分野には『用強美』つまり、役立ち、壊れず、美しいという考えが広まりました。でも、本多先生が私たちに遺したのは『真善美』という考え。本物であり、役立ち、美しいということです」。

当時の日本では「用強美」が進み、木をまねたコンクリート製のベンチや柵が街に現れた。たしかに木製より長持ちするかもしれない。「でも、本物の木でつくったベンチや柵が朽ちたら、それを換えればよいという考え方もあります。本物の材料を新しいものにして使っていく。そうした『真善美』の考え方は、いまの時代に通じるものです」。

景観を「量」で評価する

造園学の研究を進めるにあたり、熊谷さんは「人の心理とものの見え方」を深く考えるようになった。熊谷さんの中にいつもあったのが「景観」という言葉だ。人が見ることを通じて捉えられる形・姿のことを指し、似た言葉に「ながめ」や「けしき」がある。

研究でまず取り組んだのは「人がどうものを見るかを量で調べられるようにする」ことだった。身のまわりにある環境が、どのくらい良いか悪いかを測ろうとすると、音の大きさは「何デシベル」、においの強さは「何ピーピーエム」といったように、量で表すことができる。それができれば、みんなが「このくらいなんだな」とわかり合える。

「景観についても、量で表すことができれば、その景観がどのくらい価値あるものかが、説得力をもって伝わるようになると考えたのです」。たとえば、何人もの人におなじ風景の写真を見てもらい、「自然の中で建てものが目立つか」や「自然の景観と建てものが調和しているか」などを7段階で答えてもらい、そのデータを処理すれば、景観がどのくらい良いか悪いかを量で表すことができる。

景観の価値を量として測るための方法を築いた。熊谷さんのこうした取り組みにより、景観は、自然の環境の状態や、景観と人のかかわり方などを示す大切なもののひとつなのだという考え方が進んだ。

コンピュータ・シミュレーションの草分け

木々などからなる自然の景観は、春夏秋冬の季節により、また1年、5年、10年といった時の移ろいにより変わっていく。人が木を切ったり植えたりしても変わっていく。熊谷さんは、そうした自然の景観の変わり方を、コンピュータを使って見ただけでわかるようにする方法も築いていった。調べたいものをモデルで表し、それを使って実験することを「シミュレーション」という。景観の変わり方をシミュレーションで見られるようにすることができれば、みどり豊かな公園や山々の景観がこれからどうなっていくかを見ただけで予想することができる。これができれば、自然公園をつくる計画などに役立てられる。

優れたコンピュータがあるいまなら、ソフトを使えばだれもがかんたんに画面の中の絵に木を生やしたり木の色を変えたりできる。しかし、熊谷さんがこのシミュレーションの方法を築こうとしたのは1970年代。多くの人が、コンピュータにさわることもさえない時代だ。



熊谷さんがコンピュータ・シミュレーションによって表した絵の数々。はじめは2次元の単純な木を描けるくらいだったが、3次元の木や多様な植物を描けるようになっていった。

そうした中、熊谷さんは、地形が描かれたコンピュータの絵の中に、実際の森林に合わせて1本ずつ木を描いていった。コンピュータの反応がいまよりも遅いため、一晩かけてシミュレーションの絵をつくりあげたこともあった。

「達成感はありませんでした。でも、やはり見栄えには満足できませんでした」。

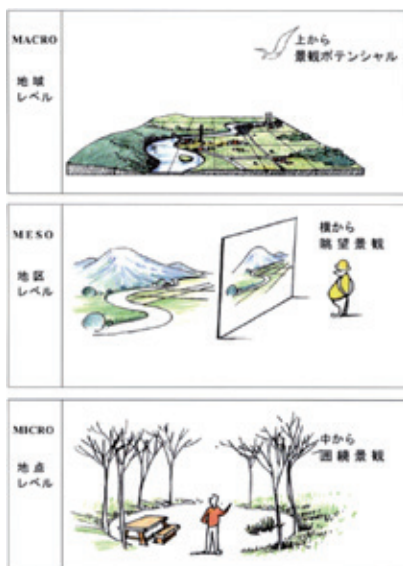
本物の景観により近づけるため、熊谷さんは進歩するコンピュータ技術を進んで取り入れた。2次元で表すほかなかった木は、3次元で表せるようになった。植物の専門家が深く携わった外国のソフトを使い、さまざまな種類の植物が成長していくようすを細かく表せるようになった。熊谷さんは、コンピュータのシミュレーションで景観を予想するというのをだれより先におこない、この方法が発展する道を切り開いたのだった。

景観を3つのレベルで分けて考える

公園や街をつくらうとすると、その場所や環境にどんな影響が生じうるか調べる必要がある。環境アセスメントだ。熊谷さんはこの中に景観に対する影響を調べることを加えるよう提案した。景観のアセスメントだ。アセスメントをして、影響が大きいとわかったときは計画を見直すこともある。

かつては、専門家たちが景観のアセスメントをおこなうと、地域での公園の位置や広さという大きな話をしているのに、公園内のベンチの色という細かい話が出され、話がかみ合わないこともあったという。「整理して話し合いができるような方法をつくる必要がありました」。

そこで熊谷さんは、景観は景観でも規模により3つのレベルに分けることを考え出した。



考案した景観の3つのレベル。

上から鳥の眼で眺める「景観ポテンシャル」、横から見る「眺望景観」、そして中から見る「囲繞景観」だ。これにより、それぞれのレベルでなにを調べるべきかがわかってくるし、話すべきことも整理されるようになる。

さらに、アセスメントをおこなってみて景観についての問題が生じるとわかったときは、この3つのレベルを“行き来”して計画を考えなおすという方法も熊谷さんは考え出した。

「たとえば、自然の環境の中に発電所のような大型構造物ができるのと眺望景観が悪くなるとわかったら、ひとつ上の鳥の眼レベルに立ち返って大型構造物の位置そのものを見直します。それができたらまた横から見るレベルに戻って、もう一

度大型構造物ができたときの影響を調べるようにするのです」。

熊谷さんのアイデアにより、景観のアセスメントがより目的にかなうものとなった。

国を支え、人を育て、地域を明るくする

「これまでの研究での実績を踏まえながら、すこしでもみなさんの役に立つことができれば」。そうした思いを熊谷さんはもち続ける。自然やみどりを通じて、国を支え、人を育て、地域を明るくする取り組みにも力を入れてきた。

2010年（平成22年）、愛知県名古屋市に世界の国ぐにの代表が集まり「生物多様性条約第10回締約国会議」が開かれた。さまざまな生きものやその恵みを保っていくために、国どうしで約束ごとを決める大切な会議だ。熊谷さんはこの会議に向けて、日本としての戦略をつくるための専門的な部会のリーダーをつとめた。「造園家、建築家、銀行家、それに歌手の方など50人以上が集まると、生物多様性に対するイメージは人それぞれ。まさに多様性のある集まりでした」と言う。さまざまな意見が出された中で、最後には「生物多様性国家戦略2010」をとりまとめた。熊谷さんのリーダーシップで、日本の進む方向が定まった。

また、1999年（平成11年）、兵庫県淡路市に建てられた兵庫県立淡路景観園芸学校で、熊谷さんは校長を務めた。兵庫県はその4年前の1995年（平成7年）に被った阪神淡路大震災からの復興のさなか。校長になってほしいと相談した当時の知事たちと「復興に貢献するような人を育てる」と志した。若い人たちだけでなく、会社をもうすぐ引退する人まで入学してきた。校長として18年。多彩な学生たちを景観の専門家や園芸療法の専門家たちに育てあげた。



兵庫県立淡路景観園芸学校。

いま熊谷さんは名誉学長をつとめている。

そして、熊谷さんの「大先輩」本多静六が設計した日比谷公園では、開園から100周年の2003年（平成15年）より毎年「日比谷公園ガーデニングショー」が開かれている。花を愛する人たちの毎年の楽しみとなったこの催しもの実行委員長をつとめているのが熊谷さんだ。「東京の中心にある銀座、日比谷、大手町、そして皇居までの地域を、花やみどりでいっぱいにするのが、夢です」。

熊谷さんの研究により、自然の環境を考えるうえで景観は欠かせないものとなった。社会に向けた取り組みにより、人びとの自然との関わりはより豊かなものとなった。

これからの景観のあり方について、熊谷さんはどう考えているのだろうか。

「みどり豊かな景観については、人の手をできるだけ加えず、自然をなにより大事にして考えるべきです。一方で、人間の生活と深く関わっている景観もあります。そうした景観をどう守っていくか。その地域で暮らすみなさんに考えてもらうということがなにより大切です」。

熊谷さんはもう一度「原風景」という言葉を口に出す。「私たちにとって身近な景観は、ひとりひとりの心の中にある原風景なのだと思います」。

原風景に思いを巡らせることから、景観の、そして自然環境の未来は築かれていく。